

クローズアップ・コレクション

さかきばくざん
榊莫山
かんざんじつとく
《寒山拾得》

1994年
166.5×183cm
榊美代子氏寄贈

道田美貴



歴史深く、静かな伊賀の山中に居を構えた榊莫山(1926-2010)(図1)は、書画にとどまらず、異分野の芸術家との合作や専門書・エッセイの執筆など、多彩な活動を展開しました。書史を研究し、文学者や哲学者など先学に教えを乞い、一方で道標や看板といった「路傍の書」を訪ね歩くことで独自に研鑽を積んだ莫山は、漢字一文字を大胆に扱った作品(図2)や、詩・書・絵を融合させた詩書画一体の作風を確立し、「現代の文人」と称されました。

中国の文人文化においては、詩作・書道・絵画のすべてに通じている「詩書画三絶」が一つの理想とされました。日本でも江戸時代に池大雅や与謝蕪村などが優れた作品を遺していますが、西洋美術の流入や近代美術教育の影響、さらには文人画鑑賞の前提となる漢詩の教養が薄れたことなどにより、文人画は退潮に向かいます。そのような中、独自の視点で我流の文人画を追い求めたのが榊莫山でした。

その探求の中で生まれた作品、今回ご紹介する《寒山拾得》は、莫山が繰り返し描いた画題のひとつ。寒山と拾得は、天台山国清寺に住み、豊干禪師に師事したとされる唐時代の伝説の隠者です。経巻を手にした寒山が「山ヘイコカ 川ヘイコカ」と問い、箒を手にした拾得が「イヤジャ 空ヘイコヨ」と応えています。古より多くの画家が手がけてきた画題ですが、莫山が描く寒山拾得ほど自由なふたりはいないのではないのでしょうか。

隠者たちの奇行ぶりは禅宗の理想とされますが、莫山は、彼らの「絶対自由の野性味に、わたしはひどく

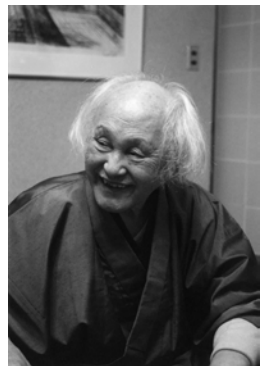


図1 | 榊莫山 撮影:太田健嗣郎

「しびれる」と語り、そのロマンを大らかな水墨画とことばで表現しました。あるときは「花アルトキハ花ニ酔ヒ」「風アルトキハ風ニ酔ヒ」、またあるときは「腹ヘッテキタナ」「ソウナ ワシャネムイ」「何カ食オウカ」「ソウナ バクテリアデモナ」と、ウィットに富んだ会話を交わす寒山と拾得。「詩書画三絶」は漢詩を添えるのが一般的ですが、莫山は子供から高齢者まで、誰もに読んでもらえるようにと、カタカナのことばを添えました。

どこまでも自由な寒山拾得。その底には「なにものにもさまたげられない大宇宙を心に抱けたら」との想いがあるといます。既成概念に縛られることなく独創性を貫いた莫山の姿勢を端的に示す、代表的な作品のひとつといえるでしょう。



図2 | (土) 制作年不詳
三重県立美術館蔵

表紙解説

「新収蔵品展 増山雪斎」より (4月1日-6月28日)

村上 敬

本作品の色彩の繊細さに、私は思わず息を呑みます。水辺に百日紅と黄蜀葵を配し、画面の中央に黄蜀葵の大輪の花を点出しています。黄蜀葵の茎を見ると、空色の羽が美しい2羽の翡翠が羽を休めています。

描いたのは、長島藩(現在の桑名市長島町)の藩主・増山雪斎(1754-1819)。文人大名として知られます。雪斎は、絵画制作において写生を重視し、“花びら1枚、葉1枚それぞれに天然の味わいがあり、それを写し取ることで、はじめて生き生きとした絵が描ける”という考えをもっていました。

本作品では、百日紅の6枚の花びらの縮れる様、すべすべとした樹皮の質感が表現されています。薄く柔らかい花びらは、陽の光を透かして白く光り、最も手前にある肉厚な葉は、あえて葉裏一面をみせるように描かれています。葉裏の繊維質な肌合いを、光沢のある葉の表面と描き分けるなど、細部まで徹底された自然描写が見どころの作品です。



増山雪斎《黄蜀葵に翡翠図》制作年不詳
絹本着色 94.6×31.3cm 三重県立美術館蔵

利用のご案内

開館時間 |
午前9時30分-午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 |
月曜日(祝休日にあたる場合は開館、翌平日)
[2026年5月7日(木)、7月21日(火)、9月24日(木)] 閉館

観覧料 |
○常設展示
[美術館のコレクション+柳原義達の芸術/特集展示]
一般 310(240)円
学生[大学・各種専門学校等] 210(160)円
高校生以下無料 ※()内は20名以上の団体料金
※4月18日(土)は、「県民の日」のため、5月5日(火・祝)は三重県誕生150周年記念のため、常設展示観覧料が無料となります。

○企画展示/その都度定めます。
※学校の教育活動として県内の幼・小・中・高・特別支援学校等の団体が観覧する場合、引率者も含めて無料となります。
※障害者手帳等(アプリ含む)をお持ちの方が観覧する場合、付き添いの方1名を含めて無料となります。
※家庭の日(毎月第3日曜日)の観覧料は、各展覧会(企画展/常設展)の団体割引料金となります。

メールマガジン |
三重県立美術館の情報を、みなさんのパソコン、携帯電話へお届けします。購読料無料。
詳しくは、美術館ウェブサイトをご覧ください。

美術館公式X |
三重県立美術館の最新情報をリアルタイムで配信しています。Follow us on X @mie_kenbi

三重県立美術館友の会へのお誘い

友の会は三重県立美術館を支える団体として活動しています。研修旅行、美術講演会、懇親会等、会員同士の楽しい交流や美術の教養を深める催しに参加できます。

年会費 |
一般会員:3,000円 ペア会員:5,000円
グループ会員(4名):8,000円

◎特典 | 会員鑑賞券配付、観覧料半額割引、レストラン・ミュージアムショップご利用割引等。詳細は三重県立美術館友の会事務局(TEL 059-227-2232/美術館FAX)までお問い合わせください。

公益財団法人 三重県立美術館 協会会賛助会員へのお誘い

美術館の調査・研究事業補助、カタログなど美術資料の作成頒布等、美術館活動活性化のための事業をおこなっています。主旨にご賛同いただき、賛助会員へのご加入をお願いします。

会費 | 年間一口
法人:50,000円 個人:25,000円
準会員:10,000円

◎特典 | 展覧会ならびに内覧会への招待、各展覧会のカタログ謹呈等。
詳細は三重県立美術館協会事務局(TEL 059-227-2232/美術館FAX)までお問い合わせください。

三重県立美術館

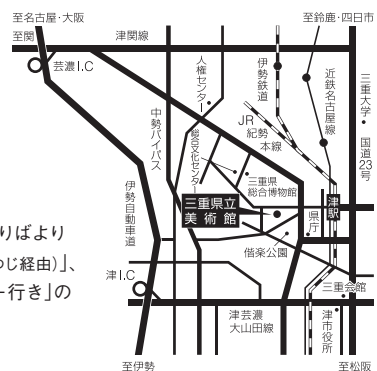
MIE PREFECTURAL ART MUSEUM

〒514-0007 三重県津市大谷町11
TEL.059-227-2100(代表)

FAX.059-223-0570

https://www.bunka.pref.mie.lg.jp/art-museum/

交通 |
津駅(近鉄・JR)西口より徒歩約10分または、津駅西口1番のりばより三重交通バス「西団地循環」、「津西ハイタウン行き(むつみ・つつじ経由)」、「夢が丘団地行き(総合文化センター前経由)」、「総合文化センター行き」のいずれかに乗車約2分、「美術館前」下車徒歩約1分
※できる限り公共交通機関をご利用ください



三重県立美術館ニュース

HILL WIND 58

MIE PREFECTURAL
ART MUSEUM
NEWS



三重県立美術館ニュース
「HILL WIND 58」

発行日 | 2026年3月19日(株・無断転載)
企画・編集・発行 | 三重県立美術館 デザイン | 濱田尚子 印刷 | サンメッセ株式会社

新収蔵品紹介

春木南湖《米法山水図》

村上 敬



図1 | 春木南湖《米法山水図》三重県立美術館蔵

2025年度の**新収蔵品**から、春木南湖(1759-1839)の《米法山水図》をご紹介します。墨一色で描かれ、漢詩が書き込まれているため、一見「難しそう」と感じられるかもしれませんが、この作品は、日本絵画の「文人画」というジャンルに属します。では、「文人画」とは何か。これは専門家の間でも長年議論が続く難しい問いです。美術史家の中谷伸生は、こうした定義を一度脇に置き、“文人画は「共感の絵画」である”と捉えて味わうのがよいと述べました¹。「共感の絵画」とは、異なる境遇にある人々が遊び、交友の証として残した絵画を指します。この《米法山水図》も、「共感の絵画」として眺めることで、より深く味わうことができるでしょう。

春木南湖について

春木南湖は、長島藩(現在の桑名市長島町)の侍臣です。一般には、長島藩第5代藩主・増山雪斎(1754-1819)のお抱え絵師として知られていますが、その経歴には不明な点が多くあります。南湖自身の記録によれば、絵は独学で習得しました²。南湖の曾孫・南溪によると、南湖の父は軍学者であり、軍学には絵画(図解)が必要だと考え、南湖に絵の修業を勧めたといえます³。正確な登用時期は不明ですが、南湖は、雪斎から厚い信頼を得ていました。1788(天明8)年には、藩が資金を援助し、29歳の南湖を長崎に留学させました。当時、絵画の本場は中国だと考えられており、長崎で中国人に絵を学ぶことは、日本の絵師の憧れだったのです。《米法山水図》は、南湖の長崎留学にまつわる一図です。

南湖、長崎へ行く

長崎において、一般の日本人が中国人と接触することは禁じられていました。そこで、藩主・雪斎は、大坂の著名な学者・木村兼葭堂(1736-1802)に手紙を出し、「南湖を中国人に会わせ、絵の稽古をさせたいので、お取り計らいください」と協力を依頼します⁴。南湖は、兼葭堂がもつ唐通詞との人脈を頼り、その召使に変装して唐人屋敷に潜入することになります⁵。長崎へ向かう途中、南湖は、大坂の兼葭堂の家に泊まり、絵について語り合いました。そして、旅立ちに際し、「長崎で中国人に会い、雲烟を学ぶ」と決意を表明しました。「雲烟」の意味は一樣ではありません。ここでは「山水画の真髄」を意味すると思われます。中国文学者の合山究は、著書『雲烟の国一風土から見た中国文化論』において、中国文化の基盤は「雲烟」にあると主張しています。それは、中国の江南地方の湿潤な風土、そこで生まれた山水画、より具体的には、山水画において墨のにじみにより大気を表現する「米法山水」の技法までを貫く、中国固有の美意識を指します。南湖は、中国人から「米法山水」の技法を学ぶだけでなく、その奥底にある中国の風土や美の精神に触れたいと願ったのではないのでしょうか。

《米法山水図》について

南湖は、長崎に1か月滞在しましたが、中国人と面会できたのは3日間でした。南湖が会った中国人は、貿易のために来日していた商人です。また、南湖は、中国語を話

せず、自ら旅日記に記した通り、漢文の専門的な素養もありません。筆談による質疑応答も、初歩的な内容にとどまっています。しかし、このような限られた時間と、言語の壁を越え、南湖は中国人と深く打ち解けました。南湖の日記をひも解くと、中国人と会った時間の半分ほどは、宴会をし、ともにお酒を飲みながら筆をとった様子がうかがえます。南湖は、中国人から借りた衣装をまとい、宴の席を盛り上げることもありました。中国人から体系的な絵画教育を受けたとは言い難く、むしろ交友のために長崎に赴いたのではないか、と思えるほどです。《米法山水図》は、別れるとき、南湖と中国人・費晴湖(生没年不詳)が合作した作品です⁶。近景を南湖が、遠景を晴湖が描いています。添えられた漢詩は、この絵を見た中国人の感想です。漢詩の一つには、「雲と烟の表現は、自然の美しさを引き立てている。南湖と晴湖の心が通じ合ったところは、まさにこの絵の中にある」と書かれています。境遇の全く異なる者同士が、絵を通じて共感を育み、共に生み出した本作。まさに「共感の絵画」と呼ぶにふさわしい作品ではないでしょうか。

- 1 | 中谷伸生「岡田半江(山水図巻(大川納涼図))」(関西大学図書館蔵)、『関西大学博物館紀要』第14号、27頁
- 2 | 春木南湖「西游日簿」(東京藝術大学附属図書館蔵)
- 3 | 春木南溪「春木三世談」『書画叢談』第5号、15-17頁
- 4 | 増山雪斎「八月付木村兼葭堂宛増山雪斎書簡」(公益財団法人脇村奨学会蔵)
- 5 | 司馬江漢「江漢西遊日記」(東京国立博物館蔵)
- 6 | 実際に南湖と晴湖が合作した山水画の原本は所在不明となっている。《米法山水図》は、南湖が鷹見泉石の依頼に応じ、自ら模写した作品である。

新井謹也と辻晋堂

一世代を超えた交友

高曾由子



図1 | 新井謹也(做明川法勝寺燒碗)1944年、個人蔵



図2 | 辻晋堂《新井孚鮮像》1949年、三重県立美術館蔵

新井謹也(号孚鮮、1884-1966)は、現在の三重県鳥羽市生まれの陶芸家。大正から昭和の時代に活躍し、文人的ともいえる独自の作品世界を確立したことで知られます。飾り気のない性格によって芸術家からの信頼があつく、新井のまわりには生涯にわたって多くの人が集いました。

新井の周りに集った人々のうち、新井を特に慕った一人に、陶彫で知られる辻晋堂(1910-1981)がいます。辻は鳥取出身、1930年代には東京で活躍していましたが、1943年に郷里に疎開した際に新井と出会いました。新井はこの時すでに還暦に近い年齢でしたが、戦時に長年拠点としていた京都での制作が難しくなったため、鳥取の「法勝寺窯」に移って作陶していました(図1)。鳥取では同地の芸術家と交流を深め、戦中期にもかかわらず充実した活動をしています。

当時30代であった辻は、主に木彫を制作していましたが、積極的に新井を訪ねて交流しました。その交友は戦中期にとどまらず、1947年に新井が滋賀県立窯業試験場に嘱託講師に招かれ、京都に戻った後にも続きました。

《新井孚鮮像》(図2)は、1949年5月、滋賀県立窯業試験場に辻が新井を訪ねて制作した新井の胸像。土の風合いを残した素朴な作品で、新井の優しく穏やかな人柄をよく捉えています。新井はこの当時木彫を制作していた辻に、何度も陶彫を作るよう勧めたといひ¹、本作共箱にも「昭和二十四年五月先生に随行して信楽に遊び

陶器試験場にてたわむれにこれを作る」と記されていることから、二人の友人関係に近い、親しい交流の中で本作が生まれたことがうかがえます。また、この前後に辻が新井に送った書簡が残されており、その経緯を伝えます。

「京都美専の話が駄目になり機会がなくて残念に存じますが、今年の夏のうちに胸像のモデルになつて頂けます様でしたら幸甚に存じます。今月中に一度中島氏をたづねて胸像を造らせて頂くやうに頼んでみやうと考へてゐますが若しこれが実現するやうになりましたら十日ばかりかゝつて 合ひ間／＼に(朝とか昼とか診察の暇に)造り、その他の時間を利用して出品制作として今一点作ることができたらと存じてゐます。」²

辻はこの時期、展覧会出品のために胸像に力を入れており、新井や京都の「中島氏」にもモデルを依頼しようとしていました。新井の胸像は出品作になることはありませんでしたが、わざわざ鳥取から滋賀に向かうほどに、辻は新井の肖像制作に意欲を持っていたことがわかります。

なぜ辻はそこまで新井を特別にしていたのでしょうか。残された文章は、辻が新井の作品と人柄を深く慕っていたことを示しています。例えば、1949年6月には、辻は前回に新井を訪ねた際に見た新井の茶碗3点について、次のように書き送っています。

「あの茶わんは、今以って小生眼底から消えず、小生に愛蔵をお許し下さるものなら何とか金策してみたいと存じますが如何な

ものでせうか(中略)斯ういふ傑作を所有し鑑賞する資格は私にはありませんでせうけれどもあの茶わんの素晴らしい美には全くのところどんな無理算段でもしようといふ心になってしまひました。」³

新井と辻は約25歳離れ、陶芸と彫刻という異なる分野を歩んでいましたが、辻は新井の作品に無二の魅力を感じていました。後には、同時代の工芸界が財欲や権勢の強化に注力していることを嘆きつつ、新井の魅力をこう語っています。

「かかる趣味性の下落と俗悪と虚偽の充満する現代にあって、名声にも利益にも一顧もせず、孤高超脱の芸術境に身を藏して俗塵を避け、黙々として只管制作に没頭されるわが新井先生の如きはまことに稀有のしかも極めて卓抜した存在であると云わねばなりません。」⁴

名声や権力を求めず、陶芸界の情勢とは距離を置いて飄々と制作を楽しむ新井の姿勢こそ、辻が共感したものでした。また、新井の辻への信頼もあつく、終生《新井孚鮮像》を愛蔵し、個展の折には辻に推薦文の執筆を依頼しました。二人の交友は、創作のあり方について、二人の間にジャンル、世代を超えた共鳴があったことを示しています。

- 1 | 辻晋堂「陶彫のこと」『泥古庵雜記』三彩社、1992年
- 2 | 辻晋堂発新井謹也宛書簡、5月7日消印(年判読不明)、個人蔵
- 3 | 辻晋堂発新井謹也宛書簡、昭和24年6月27日消印、個人蔵
- 4 | 辻晋堂「新井孚鮮の芸術に就いて」リーフレット、1953年、個人蔵